

【論文題目】

子どもも大人も楽しく学べる地域とは
—川崎市における多世代交流とコーディネーターの役割に着目し、
ESD の理念を援用した研究実践—

What is a community where children and adults can enjoy learning?

-Research and practice, with a focus on multigenerational exchange and the role of coordinators in Kawasaki City, citing the philosophy of education for sustainable development-

学籍番号：22MD0202

氏名：目黒真里奈

【研究の目的と方法】

本来、地域で子どもも育て地域全体が子どもと大人との関わりで機能していくはずが、現代社会では子どもと大人が共に学ぶ場は少ない。筆者はこれまで公立学校教員として勤務し、子どもたちが多様な地域の人と触れ合い、地域の課題を自分事として捉えたときに、普段の学校では見せることのない生き生きとした表情で課題を解決しようとする様子を見てきた。筆者が調査した地域には身近な地域の現実的課題に実践的に取り組んだり、多様な立場や世代の人とつながり、互いに学び合ったりする場があること、また地域の子どもの寄り添い活動をする人がいることに気付いた。

そこでESDの理念を援用し、子どもと大人が世代を超えて楽しく学び合える地域社会の在り方を議論することで学校・家庭・地域のさらなる連携の促進、地域の子どものよりより学びを実現することが可能ではないかと考えた。

研究目的として以下の2つを掲げた。

①「子どもも大人も楽しく学べる地域」を実現するためには、どのような機能が地域社会に必要であるのかを明らかにするために、ESDの視点からの分析と以下の6つ仮説を立てその妥当性を分析する。

②地域の多様なステークホルダーをつなぎ、学びの仕組みを支える人的要因としてコーディネーターの役割や重要性を考察する。

<6つの研究仮説>

①子どもたちが学校外での地域人材と関わり、共に活動することは、子どもたちにとって豊かな学びを育むことになるのか。

②青年期にさしかかり、進路を決めるときにも地域の方から助言をもらうことができたり、地域は子どもたちのよりどころや居場所になったりするのか。

③子どもたちは、地域住民と関わり、共に地域の課題を当事者意識として捉えて主体的に活動を行うことで、将来自分生まれ育った地域に愛着をもつことができるのではないのか。

④地域住民が子どもたちと関わり、地域の様子を見守ることで、子どもたちの負の変化に気づき、組織的に対応できるのではないのか。

⑤地域商店街の事業者にとっては、子どもたちが商店街に足を運ぶことで、商店街に活気が湧き、結果として街の活性化につながるのではないのか。

⑥地域住民がコーディネーターとして地域をつなぐことで、その後も継続的なつながりが生まれるのか。

6つの仮説を検証する上で、川崎市内の7つの行政区の子ども会議の1つ「川崎区子ども会議」、平成26年から地域ぐるみで子どもの学習や教育をサポートする事業「寺子屋事業」、地域商店街が進める「鋼管通商栄会ぶつぶつ交換」への調査を実施し、関係者へのインタビューを実施する中で、コーディネーターの役割を議論した。調査方法として、構築主義をもとに解釈的アプローチを通して非構造化インタビュー調査やナラティブアプローチにより調査・分析を進めた。

【論文の構成】

第1章 序論

第1節 研究の背景と問題の所在

第2節 研究の目的

第3節 研究の対象と方法

第4節 論文の構成 フローチャート

第2章 多様な場面で捉えられる ESD 教育

第1節 子ども大人も楽しく学べる地域の担い手づくりのイメージー本研究の出発点ー

第2節 ESD 教育と先行研究

第3節 学校教育における ESD 教育

第4節 社会教育（生涯学習教育）から見た ESD 教育

第5節 ESD 教育における地域コーディネーター論

第3章 分析の枠組み ESD の視点と研究仮説

第4章 子どもの意見を反映することで社会参画につながる効果ー川崎区子ども会議の事例からー

第1節 川崎市の子ども会議の概要と地域教育会議

第2節 川崎区（行政区）子ども会議

第3節 子ども会議の参加者とサポーターの声

第4節 小学生の視点からの考察

第5節 サポーター（高校生）視点から考察

第5章 多世代交流が子どもの学びに与える効果ー寺子屋事業の事例からー

第1節 寺子屋事業の概要

第2節 寺子屋先生（高齢者）の視点からの考察

第3節 保護者の視点からの考察

第4節 川崎市教育委員会 生涯学習推進課の視点からの考察

第5節 コーディネート機能についての考察

第6章 様々なステークホルダーと地域住民が共に地域づくりを行う効果

ー川崎区鋼管通商栄会の事例からー

第1節 鋼管通商栄会の取り組み

第2節 子どもの視点からの考察

第3節 商店街の事業者からの視点からの考察

第4節 NPO法人ミニシティ・プラス事務局長と理事の視点からの考察

第5節 神奈川県商業流通課の視点からの考察

第6節 コーディネート機能についての考察

第7章 子どもも大人も楽しく学べる地域の在り方

第1節 川崎市の地域の取り組みにおける ESD 視点からの評価と仮説の検証

第2節 コーディネート機能の重要性

第8章 結論

第1節 結論

第2節 今後の課題

謝辞

参考資料、参考研究論文、参考著書

【論文の概要】

筆者の携わってきた地域には学校や家庭だけではなく、地域の中に子どもを温かく受け止める居場所があり、多世代の子どもたちが安心して関わり、学びを育む場が見られた。また、その周りには必ず信頼できる大人が存在した。持続可能な地域の担い手には大人はもちろんのこと、未来を生きる子どもの力が必要である。子どもと大人の学びを共に育むことを考えることが、地域力の向上につながると考えたことが本研究の出発点である。

ESD は、2002 年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で日本が提唱した考え方であり、持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）のことを指す。先行研究から見た批判的捉えでは、岩佐（2015）が、ESD の普及が始まる以前から実施されている持続可能性をめざした地域づくり活動を、後付けで ESD のラベルを貼っているのではないかと示唆している。他にも、原田（2009）が述べているように国家の主導で展開され、普及される ESD の在り方に疑問を呈している研究者が存在することを読み取ることができる。第2章 第5節では、ESD 教育の地域コーディネーター論として、学校、家庭、地域が一体となった ESD 教育を進める上で、地域をつなぐコーディネーターが必要であると論じた。早坂（2020）は、先行研究において地域コーディネーターの課題を『地域コーディネーターが特定の人物に偏ってしまう人材の「固定化」と、その地域コーディネーターがいなければ回らなくなってしまう活動の「属人化」さらには、地域コーディネーターの「高齢化」と「後継者の不在」といった諸課題である』と述べている。

このような先行研究をふまえ、ESD の視点から川崎市にある3つのコミュニティを調査し、「子どもも大人も楽しく学べる地域」を実現するためには、どのような機能が地域社会に必要であるのか、また学びの仕組みを支える人的要因としてコーディネーターの役割や重要性を考察するために2つの手法を用いて調査した。

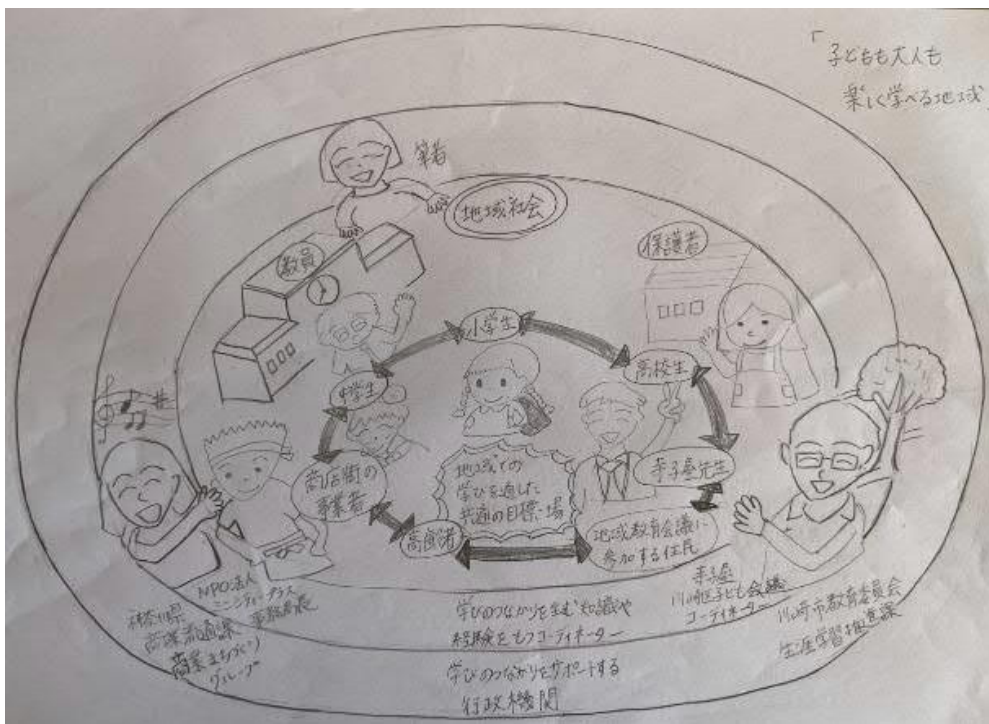
ESD の視点から検証し、3つの事例の中から川崎区子ども会議を例に挙げる。川崎区子ども会議では、川崎区の課題を地域住民と考え、共に解決するために行動する子どもたちの姿が見られた。会議では、多様な立場の人が存在する中で、子どもたちが相手の意見を尊重し、対等な立場で議論しようとしていた。参加していた高校生のサポーターからは、「この会議では、周りを見る力や合わせる力が付いたと思う。物事を色々な目線で考えることができる。」という声を聞くことができた。地域の大人と町の課題を話し合う中で、「ESD で育みたい力」の1つである「コミュニケーションを行う力」や「他者と協力する態度」が身に付いている。さらに、時には批判的な議論ができる関係性が多世代の中で生まれていた。子どもを子ども扱いするのではなく、意見を述べる存在として認めることで、年齢に囚われない人間同士の対話関係の構築、子ども自身の存在意義の実感に気付くことができる。また、異なる立場から意見を伝え合うことで、思いを声に出すことの大切さに気付く、社会参加へ一歩踏み出す子どもたち。コーディネーターと共に子どもも大人も楽しみながら学ぶ中で社会的関心が生まれ、持続可能な社会に向けて一人一人が行動できるようになる。

参考資料：「ESD 初めの一步」

6つの仮説の検証を行い、ここでは、仮説⑤である「地域商店街の事業者にとっては、子どもたちが商店街に足を運ぶことで、商店街に活気が湧き、結果として街の活性化につながるのではないか。」について検証結果を述べる。商栄会のイベントでは、地域に住む小学生や NPO 法人ミニシティ・プラスのアクター、商栄会会長、コーディネーター、神奈川県商業流通課の連携が見られた。地域の子どもたちは、自分事として商栄会を活性化する方法を模索した。商栄会に親しみをもてるような歌を作曲、各商店を調査して商店の良さを SNS で宣伝する方法をコーディネーターと共に考えた。保護者からも「商栄会のイベントが地域のために働きながら学べる場になっている（小さな社会生活の勉強）の場である。」と声を聞くことができた。また、神奈川県商業流通課の方から「子どもを媒体にすることで、斬新なアイデアが生まれる。子どもの力は大きい。商店街の事業者にとっては人生が豊かになる。」との声を聞くことができた。コロナ禍が明けて、2023年10月のイベントでは、昨年度もイベントに参加した地元の小学生の参加が見られた。一度、地域のために働き、「地域のために働いてよかったな。」と達成感を感じることで、地域への思いは継続する。再度、地域に足を運び

っかけとなる。大人も子どもも共に地域の担い手としてまずは地域に関心をもつ、足を運ぶことが必要である。いずれ、小学生が大学生になった時、この地域を思い出し、いつでも戻ってくるのできる場所になることで、子どもと地域住民がつながり、結果として長期的な街の活性化につながると結論付けた。子どもを主体にして大人も子供も学び合える地域、個々に充実感を得て、楽しいと思える地域こそが、その地域が活性化していると言える。

本研究の結論として、①「子どもも大人も楽しく学べる地域」とは、「子どもと大人が共に地域づくりの担い手として、地域の中で地域の課題に当事者意識をもって解決しようと活動することで、達成感や成就感を感じることができる地域。地域にある地域に住む小学生、中学生、高校生、地域教育会議の役員などの多様な世代の方とのつながりが生まれ、各ステークホルダーが孤立せずに、横のつながりがある地域。互いに良い刺激を受ける地域。」である。地域という共通の場で、地域をよりよくしたいという共通する目的が存在する。また、そこにはコーディネーターとして、信頼できる大人が傍にいる。



2重目の円に橋渡しとなるコーディネーターが位置する。コーディネーターは、子どもと大人の学びのつながりを生む知識や経験をもつ。それぞれのコーディネーターは自身が得意とする子ども達が飽きない学びの仕掛けをもち、子どもの関心と地域のニーズを調和させる役割をもつ。また、筆者も地域住民の一員として子どもを地域に連れ出し、様々なイベントに参画させるなど、子どもの関心と大人のニーズを捉え共に活動し

図7-1 「子どもも大人も楽しく学べる地域」とコーディネーターの位置
出典：研究の調査をもとに筆者が作成

② コーディネーターの果たす役割は、「地域の社会関係や人的資源を把握し、子どもの関心と大人や町のニーズを合わせて地域の大人と子どもをつなぐ。子ども主体で活動ができるように仕掛ける、地域社会での持続的な活動を考える」ことである。学校の先生ではなく、地域に住む一人の大人として「大人の役割」を行使し、子どもとの関わりをどう作るのか、安心して自分の意見を表出できる場を構築するために各コーディネーターのもつ個性ある手腕に委ねられている。コーディネーターは地域住民であっても、NPOなどの団体であっても地域に継続的なつながりが生まれ、プロジェクトに参加した子どもが将来街づくりに参画するきっかけとなる。コーディネーターが地域住民でない場合も、地域の社会関係を把握し、住民との信頼関係を構築することで地域をつなぐ役割を果たすことができる。また、子どもを主体にして活動に取り組むことで、子どもが地域のために自らできることを考え、実施することで継続的なつながりが生まれる。地域の子どもの受け皿が1つではなく、地域にいくつもあることで子どもが自ら参加しやすいコミュニティを選択できるようにする。子どもの興味・関心、主体性を大切に、どのコミュニティも、切り離されたものではなく、地域の中で横のつながりをもち、共に学び合うことのできるものとなればよい。